

2020年度第3回キャリアパス講演会・懇談会

下記の通り、2020年度第3回キャリアパス講演会・懇談会を開催致します。気象大学校を卒業後、気象研究所、筑波大学大学院、気象庁で気象の研究・教育・業務で活躍されて素晴らしいキャリアパスを形成された気象大学校教頭の加藤輝之先生の講演を聞き、懇談して頂きます。学部1年生から大学院生まで、ぜひご参加ください。 **入退室自由**

日時：2020年12月9日(水) 16:10～

会場：オンライン (右QRコードにより事前登録をお願いします)

話題提供者：加藤輝之氏 (気象庁気象大学校教頭)

演題： **気象庁の業務紹介と**

大気大循環からメソ対流系との出会い

趣旨：気象庁では昨今の顕著現象の激甚化に対処するため、今年度10月から次長級ポストとして新たに気象防災監を置き、内部部局を図1のように改編しました。新たに設置した情報基盤部では、情報通信業務だけでなく、数値予報や気象衛星に関わる業務を担います。大気海洋部では、観測・予報に関わる業務を集約し、気候情報や海洋情報についても発信します。

気象庁の業務は昭和27年に施行された気象業務法で規定されており、「災害の予防、交通の安全の確保、産業の興隆等公共の福祉の増進に寄与するとともに、気象業務に関する国際的協力を行うことを目的とする」と記載されています。具体的には、気象、地象、地動及び水象の観測並びにその成果の収集及び発表、気象、地象及び水象の予報及び警報とそれらに関する情報の収集及び発表、地球磁気及び地球電気の常時観測並びにその成果の収集及び発表、以上の事項に関する統計の作成及び調査並びに統計及び調査の成果の発表であり、大気、海域、陸域を包括的に扱っており、国民の身近な業務を行っていることから責任感を持って遣り甲斐がある仕事内容です。具体例については、講演の中でお話しします。

講演者のことをメソ気象の専門家と捉えている方がほとんどだと思われそうですが、スタートは気象大学校時代に行った気象学に基づく理論的研究で、卒業後もしばらくはロスビー波伝播にともなう大気大循環研究を行っていました。この研究でも博士論文を取得できるだけの論文数を書き上げており、これで博士論文を取得しようとして東京大学の当時新野宏助教授に相談に行ったところ、メソ気象で取得するように依頼され、「Numerical study of the formation and maintenance mechanisms of a rainband inducing a heavy rainfall」と題したタイトルで学位論文を1998年に提出しました。この学位論文の核となった論文で気象学会の山本・正野論文賞を獲得しています。さて、大気大循環からメソ気象の専門家になった経緯は多々ありますが、1つは大学校卒業後、1年間気象観測船に乗って海上気象観測業務に従事したことです(図2)。この船は季節により天気予報に重要となるデータを取得するために日本周辺の海に出ていました。考えてみてください。そのような領域ではとても海が荒れるのです。すなわち、身を持ってメソ気象を感じ取ったこととなります。それからしばらくして、気象研究所に異動になり、数多くの野外観測に関わるとともに、JMA-NHMと呼ばれる非静力学モデルの開発に従事し、多くの経験を積むことができました。それらの話の一部をお話ししたいと思います。

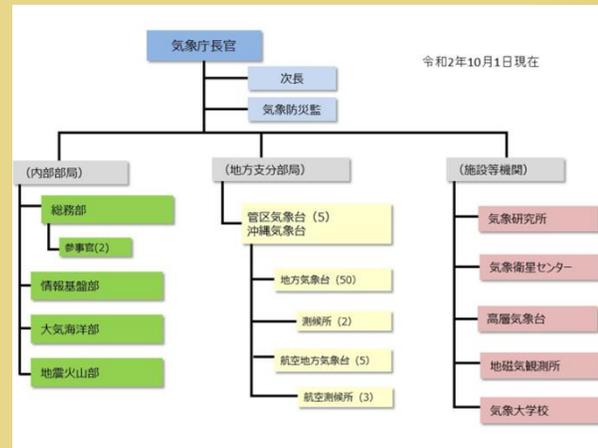


図1 気象庁の組織図



図2 気象大学校卒業後の気象観測船「啓風丸」での体験